# 第４回世界武術選手権大会 開催

## 日本は銀１･銅２　12人参加　11月３～８日ローマで

「第４回世界武術選手権大会」は11月３日～８日，国際武術連盟（ＩＷＵＦ）の主催，イタリア武術連盟の主管により，イタリアのローマ市で行われた。

### 世界選手権はヨーロッパ初開催
### 武術太極拳競技の国際化を反映

今回の世界選手権は，武術太極拳競技の国際的な広がりを反映して，初めてヨーロッパで開催されることになった。

世界選手権に先立ち，ＩＷＵＦ総会が11月３日に開催された。前号で既報の通り，ローマ市のイタリア五輪講堂で行われた総会では，新たに６ヵ国･地域の加盟を承認し，ＩＷＵＦ加盟が77ヵ国･地域となったことから国際オリンピック（ＩＯＣ）に承認団体として申請することを正式決定している。

大会には，ＩＷＵＦ加盟の57ヵ国･地域から役員･選手800人が参加して，ローマ市内のパラオール（PALAEUL）体育館で行われた。

日本選手団は石原泰彦監督（日本連盟理事），孫建明コーチ（日本連盟技術副委員長），李霞コーチ（日本連盟技術副委員長），今夏の第14回全日本選手権大会で選抜された代表選手８人，および帯同審判員として及川佳織国際審判員（日本連盟公認１級審判員）が参加し，合計12人で編成された。11月１日に日本を出発，10日に帰国した。選手団とは別に，旅行社により企画された世界選手権観戦ツアーの一行が会場を訪れた。

盛大に行われた第4回世界選手権大会開幕式

競技は，国際競技種目の太極拳，南拳，長拳，刀術，剣術，棍術，槍術，男女14種目が正式種目として実施された。他に散打競技が行われたが，日本は規定套路種目のみエントリーした。

日本は，女子の赤澤依美（太極拳）はじめ高橋智子（太極拳），阿部秋子（南拳），神庭裕里（長拳，剣術，槍術），男子の渡邉俊哉（太極拳），早岡慎介（南拳），高山宗久（長拳，刀術，棍術），佐久間亮司（長拳，剣術，槍術）の各選手は，世界のトップ選手を擁する中国，急速に実力をつけつつあるアジア各国の選手団と競い合った。

### レベルアップ目覚ましいアジア各国
### 太極拳で赤澤依美選手が銀メダル

女子選手では，赤澤選手が太極拳で銀メダル，神庭選手が剣術で銅メダルをそれぞれ獲得。男子選手では，渡邉選手が太極拳で銅メダルを獲得している。日本勢は全員が入賞を果たしたものの，銀メダル1，銅メダル2という成績に終わった（成績一覧は４頁掲載）。

国際競技大会において，日本はこれまで中国に次ぐ第２位の成績を保持してきた。今回の大会は，武術太極拳競技の国際化への大きなうねりとともに，アジア各国･地域が急速にレベルアップをはかってきていることを痛感させられる結果となっている。

世界選手権大会は毎回，西暦奇数年に開催されている。次回は，２年後の1999年に開催される。

〈第4回世界選手権大会戦評〉

# 組織をあげて強化が急務

## ―日本選手健闘するもアジア勢に及ばず―

日本選手団監督　石原泰彦

大会では，初めて審判の「回避制」が採用され，各国から派遣された国際審判員（帯同審判員）は，自国の選手が演技する時は，採点から外れて，6番目の審判員が採点を行った。これにより，自国の選手に高い点数を出す現象が無くなり，公正感を保つことができた。その反面，各審判員は他国の選手に低い点数を出す傾向になり，平均点としての最終得点が接近した僅差の勝負となった。

**■長拳・南拳で新人が頑張り，ベテラン勢はブレーキ**

国際大会初出場の男子南拳早岡が頑張って5位に，男子槍術で佐久間が7位に入賞した。今後の成長と活躍が期待される。女子南拳の阿部，女子長拳神庭はミスが出てメダルを逃し各々4位と5位に終わった。

前大会で刀術金メダルの高山は，長拳，刀術，棍術のいずれも7位に終わった。ベテラン組はよく健闘したにもかかわらず，いずれもアジアの各国のめざましい成長の前に，前大会の成績から後退する結果となった。

**■太極拳　韓国に敗れる**

男子太極拳は，すでに国際大会で実績のある渡邊が，中国の陳思坦，台北のチャンミンシューに次いで銅メダルと順当な成績を収めた。女子太極拳の赤沢と高橋も，5月のプサン第2回東アジア大会に引き続いて出場した。この種目は中国選手がエントリーしていない中で競われ，赤沢選手は韓国のエウンキョンブー選手と同点となり，同点処理ルールにより惜しくも金メダルを逃した。

因みにプサン大会では，1位中国梁小葵，2位赤沢，3位韓国エウン選手，6位高橋であった。同点処理ルールの僅差勝負とは言え，5月以降の韓国選手の成長ぶりが金メダルを決めたことになる。試合結果が判明すると韓国選手，応援団は熱狂し，後日の中国「体育報」紙で大見出しで「日本太極拳初めて韓国に敗れる」と報道された。

**■アジア諸国の台頭，日本の後退**

本大会の顕著な特徴は，中国を除くアジア各国がいずれも90年北京アジア大会以降着々と積み重ねてきた選手強化の成果が極めてはっきりと表れ，日本がそれに取り残されたことである（別表，第4回世界選手権メダル獲得数一覧を参照）。

香港は中国からの移籍選手だけでなく，バンコク・アジア大会以降にも備えた若手選手が成長しており，国家が直接支援して選手強化を行っている韓国や台北のみならず，ベトナムも選手層の厚さに目を見張るものがある。選手の経済環境が厳しいモンゴルも，メダルこそ得られなかったが選手の技術が着実に進歩していることを示した。

日本チームの選手は，それぞれ学業や職業を持ちながら，精一杯の訓練を積んで大会に望んだ。しかし，アジア各国の強化訓練の成果の前には従来の成績をあげることができず，全体としては過去の「中国に次ぐ成績」から「8位」に後退した。

**■組織をあげての強化対策を**

アジアの各国が強化に本腰を入れはじめて7年が経過した。過去数回の国際大会の度に，日本チームの監督・コーチはアジア各国の脅威と日本の強化体制の不備を指摘してきた。

筆者は本大会の日本選手団監督として，日本連盟と各協会はじめ関係者があらためてこの現実を認識したうえで，来年12月のバンコク・アジア大会に向けての短期的な強化策と，それ以降の中・長期的な選手養成と強化方針について，具体的な強化策を不退転の決意を持って講じ，選手により大きな希望と励ましを与えていただくよう希望するものである。　〈日本連盟理事〉

**●第4回世界選手権メダル獲得数一覧**

| No. | 国名 | 金 | | 銀 | | 銅 | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 中国 | 6 | (12) | | (1) | | | 6 | (13) |
| 2 | 香港 | 3 | (1) | 4 | (5) | 2 | (3) | 9 | (9) |
| 3 | 韓国 | 2 | | 1 | | 2 | | 5 | |
| 4 | ベトナム | 1 | | 3 | | 4 | | 8 | |
| 5 | 中国台北 | 1 | (1) | 2 | (1) | | | 3 | (2) |
| 6 | フィリピン | 1 | (1) | | (1) | 1 | (3) | 2 | (5) |
| 7 | マカオ | | | 2 | | | (1) | 2 | (1) |
| 8 | 日本 | | (2) | 1 | (6) | 2 | (4) | 3 | (12) |
| 9 | シンガポール | | | 1 | | | | 1 | |
| 10 | マレーシア | | | | | 1 | (4) | 1 | (4) |
| 11 | オランダ | | | | | 1 | | 1 | |

※括弧内は第1回大会（1991年、北京で開催）